北京の愛、上海の愛――胡也頻とその初期小説

小川主税

一　はじめに

一九二〇年代において、北京と上海はそれぞれ全く異なる都市として発展を遂げていた。北京という古都は学問の都市、あるいは文化の都市として。上海という新興都市は国民革命の熱気が渦巻く地、あるいは産業と金融の中心地として。〝文化城〟たる北京では学生や文化人が集結して文学芸術がさかんに議論される一方、革命の地たる上海では国民党政権の介入により急速な商業都市化が推し進められていた。

このような二都市が担った機能を探る一つのケーススタディーとして、本稿ではある人物に着目してみたい。その人物こそは、北京・上海にまたがって生活し、創作を行っていた胡也頻（一九〇三～一九三一）という作家である。

一九二四年に文壇デビューを果たし、左翼作家聯盟（左聯）にて要職に就いていた胡也頻は、一九三一年に国民党政府によって銃殺され、その生涯を閉じた。この悲劇的な死をもって、胡也頻は政治的抗争に殉じた「左聯五烈士」のひとりとして中国現代文学史上の地位を与えられている。そのため、従来の研究においては、左聯時代の創作活動のみが過剰に評価され、それ以前の文学的成就は等閑視されてきた嫌いがある。

しかし、胡也頻の作家人生を振り返ってみたとき、そこに左翼作家としての側面はほとんど見出されない。むしろ浮かび上がってくるのは、自身の経験と思しき愛情生活を数多く作品化していた、恋愛作家としての胡也頻の姿である。

以上を踏まえて本稿では、一九二〇年代における胡也頻の恋愛小説の検討を行う。その際に着目したいのが、胡也頻と丁玲（一九〇四～一九八六）との愛情関係である。彼ら二人は一九二五年に北京で同棲を始めたのちに独特な愛情生活を実践しており、そのことは胡也頻の小説を読み解くうえでも重要な鍵になりうると思われる。以下、一九二〇年代における青年男女の最大の関心事であった恋愛の様相をも視野に入れながら若干の私見を述べてみたい。

二　精神恋愛と「自由」

一九一九年の五四新文化運動以降、青年男女の多くは儒教道徳の軛を脱し、自分たちの未来を自分で決定しようと考えるようにな

った。とりわけ彼らが多大な関心を寄せていたのが、男女の自由意思に基づく恋愛、すなわち自由恋愛である。民国期以前の結婚とは親(家)が決めるものであり、そこに当人たちの意見が考慮される余地はなかった。対して自由恋愛とは、家父長の意思ではなく、自らの意思によって愛する者を選ぶという崇高な信念であったのだ。こうして五四以降の青年男女は次々と自由恋愛を実践していったのである。

では、このような時代にあって、胡也頻と丁玲はいかなる愛情生活を営んでいたのか。晩年の丁玲は胡也頻との関係を振り返り、次のように語っている。

> 也頻という人は本当にとても純潔な人でした。こんなに純潔だった人は朱謙之を措いてほかにはいません。五四時代の人ですが、朱謙之は妻と関係を持たなかったのです。(中略)わたしと胡也頻も同じでした。わたしは自分の自由を大切にしたかったのです。もし関係を持ってしまったら、それで決まってしまうだろう。そんな考え方があったのです。(一)

朱謙之(一八九九～一九七二)とは、胡也頻や丁玲と交友のあった人物。丁玲の回想によれば、朱謙之は妻と性交を伴わない夫婦関係を送っていたという。この点については朱謙之自身も言及しており、妻との関係を〝pure love〟、すなわち精神恋愛であったと述べたうえで、二人の愛を永続させるために恋愛の墳墓たる性交渉を持たなかったと回想している。(二)この精神恋愛を追求し実践していたのが胡也頻と丁玲であった。

そして、ここで併せて確認すべきは、丁玲が「自由」という価値観を重要視していた点である。丁玲はこの「自由」について繰り返し語っている。

> わたしはそのころ恋愛に関して全く心づもりがありませんでしたし、恋愛や結婚によって縛られたくもありませんでした。わたしは自由を求める人間なのです。ですがそのころは環境に縛られ、胡也頻と連れ立って北平に戻るほかなかったのです。(中略)わたしたちは互いに理解し合っていましたし、そのうえ気遣い合ってもいましたが、たしかに夫婦の関係は生まれませんでした。(三)(傍線は引用者による。)

ここには、恋愛や結婚に身を委ねてしまえば自らの人生を思い通りにすることは不可能になるという価値観が示されている。裏返して言えば、意のままの人生を送るためには、恋愛や結婚に振り回されてはならないということである。この考えは恋人である胡也頻との間にも共有されている。「もし相手に恋人ができたならその相手は去ってもいいし、自分に恋人ができたなら自分も去ってもいい」(四)。当時の丁玲は胡也頻との間にこうした取り決めを交わしていたのである。

上述した晩年の丁玲の言および両者の取り決めを踏まえるならば、「自由」とは次のように捉えられていたと言えるだろう。すなわち、排他的に愛し愛されるというモノガマスな関係に固執せず、相手にもその関係を強制しないこととして。つまり丁玲は、自らの意思に基づいて愛する者を選んだうえで、各々の自由な人生選択を

も互いに許容しあうような関係性を胡也頻に求めていたのである。

以上、胡也頻と丁玲が築いた愛情生活の様相について確認してきた。たしかに「自由」とは美しく崇高な信念として二人の眼に映ったことだろう。しかし、現実の生活とは、彼らが思い描いたほどに甘く単純なものではない。果たして二人は、理想としての「自由」を全うすることができたのだろうか。

三　恋敵の出現

胡也頻と丁玲が北京で同居していたのは一九二五年から一九二七年にかけてのおよそ二年間である。そのころの中国では、五・三〇事件や北伐戦争などの国民革命が上海を中心に相次いで勃発していた。青年男女の多くが南方の革命根拠地へと旅立つ一方、創作活動に心血を注いでいた二人は〝文化城〟たる北京に留まるほかなかったため、鬱屈とした日々を過ごしていた。こうしたなか、現実社会との接点を模索する二人を教え導いたのが馮雪峰(一九〇三～一九七六)である。馮雪峰は、優れた左翼文芸評論家かつ共産党員としてその名を知られた人物。この啓蒙者たる馮雪峰にとりわけ魅了されたのが丁玲であった。馮雪峰と「国事や文学を、そしてそのころ誰もが感じがちであった一抹の寂寞とした胸中を語り合った」[五]丁玲は、彼に対して一人の共産党員としてのみならず、一人の文学者としても憧憬のまなざしを注いでいたようだ。そしてまもなく、丁玲は人生の師とも言うべき馮雪峰に熱烈な恋愛感情を抱くようになる。

三人の出会いからわずか数か月後の一九二八年二月、前月に上海へ渡っていた馮雪峰を追うかたちで、丁玲もまた胡也頻を連れて北京から上海へと南下する。北京での鬱々とした生活を終え、二人はついに上海での新しい生活を送り始めたのである。しかし上海移住後まもなく、胡也頻は恋人をめぐる三角関係の一端を担わされることとなる。

一九二八年三月、馮雪峰の取り計らいにより、三人は杭州の葛嶺にて再会の機会を得る。このとき、馮雪峰との別れを惜しんだ丁玲は、「わたしたち三人ならずっと友人のまま生活を続けることができる」[六]という考えのもと、三人での同居を提案したのである。この奇妙な同棲生活から六日後、胡也頻は丁玲と馮雪峰の親密な関係に堪えかねて不満を漏らす。すると丁玲はあけすけにこう告げたのだった。

> わたしたちはけんかしちゃだめだし、一日中一緒にいてもだめだわ。(中略)こんなふうにしていたらよくないから、あなたは上海で数日間、わたしは杭州で数日間、試しに別々に暮らしてみましょうよ。もしお互いに順応できたとしたら、わたしたちは別れることにしましょう。[七]

ここにみる丁玲の言に、彼女自身の価値観、すなわち互いに干渉し合うことなく各々の自由な人生を尊重するという考え方が表れていることは言うまでもあるまい。北京時代の丁玲がより自由な同居生活を追求したうえで、二人の関係を自由に決定できると考えていたことは前節で見た通りである。

この丁玲の言に胡也頻はもはや賛同できなかった。怒りのあま

り葛嶺を飛び出した胡也頻は、上海に住む友人・沈従文（一九〇二～一九八八）のもとを訪ね、今後の身の処し方について意見を乞うた。丁玲と話し合ったうえで、二人の関係を改めよという沈従文の真摯な忠告により、一連の別居騒動はほどなくして解決に向かっている。

しかし、ここで注目したいのは、別居騒動の経過そのものではなく、別居騒動がもたらした大きな傷である。晩年の丁玲は当時を振り返り、「わたしは後になってそんな考えは空想であり、主観にだけ頼っていてはいけないと考えたのです。一九二八年になって也頻と一生を共にすべきだと決めました。自分が自由を持ち続けるという幻想を断ったのです」[八]と語っている。丁玲は胡也頻と馮雪峰との間で選択を下さねばならないこと、そして理想とする「自由」が幻想にすぎないことを悟ったのである。

以上、胡也頻と丁玲が二人の関係性を改めることとなった事件について、丁玲の言を中心に概観してきた。だが、ここで次のような疑問が生ずる。三角関係の当事者であり、理想として思い描いた愛情生活の行き詰まりを痛感した胡也頻は、こうした経験をどのように受け止めていたのだろうか、と。その問いに対する答えを胡也頻の恋愛小説から探ってみたい。

四　忘れえぬ記憶

胡也頻の作家としての人生は、一九二四年から一九三一年までのおよそ八年間である。しかし、この短期間に彼は百篇以上もの小説を執筆している。その大量の小説には愛をめぐる物語も少なくない。たとえば、新婚旅行での夫婦の悲劇を扱う「一対度蜜月去的人児」[九]（一九二七）や、旧式結婚の弊害を説く「家長」[一〇]（一九二七）、初恋の人物との再会を描いた「初恋的自白」[一一]（一九二七）などが挙げられる。これらはいずれも北京滞在中にものされた作品である。

本稿では特に、一九二六年に北京で執筆された「昨夜――一夜供状」[一二]（以下、「昨夜」とする）を取り上げておきたい。主人公の蘋は恋人の曼伽と共寝をしていた時、夜半に目が覚めて自慰に耽ってしまった過去を持つ。恋人にそのことを察せられた蘋は彼女から性的交渉を持ち掛けられるが、それを拒絶したうえで二度と自慰をすまいと誓う。齊藤大紀は胡也頻と丁玲の愛情関係を整理した上で、性的交渉を肯定すれば互いの自由な人生選択を失することとなるという懸念が蘋と曼伽の間にもあったのではないかと指摘している。[一三]胡也頻と丁玲との間で交わされた恋愛観が小説にも投影されている点で、「昨夜」は注目すべき作品である。

以上の北京時代の四例に見て取れるのは、多様な視点から恋愛を描こうとする作家としての姿勢である。ヴァリエーションに富んだその作風こそが胡也頻小説の最大の特徴であったと言ってもよいだろう。ところが、彼の作品を読み進めてゆくにつれ、我々はあることに気付かされる。北京から上海へ渡った一九二八年を境に、胡也頻の恋愛小説にはある共通したモチーフが頻出するようになるのである。このことは彼の創作活動の観点から見て非常に特異なものとして注目される。まずは一九二八年の杭州滞在中に執筆された「黒点」[一四]という小説を読んでみよう。

恋人の女性の浮気に思い悩む旋波は、彼女と決然と手を切るべきだと思いながらも、それを行動に移すことができない。旋波は最

終的に彼女の浮気を許し、彼女の過ちを忘れようとするのだが、彼女とキスをした瞬間、あることに思い至る。

けれども二人の唇がぴったりと接触して互いに甘美な幸福に酔いしれたとき、旋波は突如として思い出したのである――今しがた忘れ去ったあのことを。

「もしぼくの幸せが汚れのない一枚の白い布だとしたら、その過ちは白い布についた黒い点だ！」

さらに、彼はこう予感した。生涯にわたって自分の心に、この黒い点は永遠に拭い去ることのできないものとして残り続けるのだ、と。(一五)

恋人をなおも愛するがゆえに彼女の浮気を不問に付すことを決心したものの、その過失の記憶が旋波の心に重くのしかかり続けることが暗示されて小説は閉じられる。ここで再度、先に挙げた「昨夜」を我々は想起しておきたい。「昨夜」では、互いの自由な愛情関係を尊重する男女が描かれていたのだが、「黒点」においては恋人の過去の行動を忘れ去ることができずに苦悩する男性主人公に焦点が当てられているのである。

恋人との関係をめぐって思い悩む男性主人公の姿は、「黒点」から約六か月後に上海で発表された「消磨」(一九二八)(一六)にも見出せる。主人公は作家の白川。ある時、彼はかつて同棲していた恋人から手紙を受け取る。その恋人は別の男性と恋仲になり白川のもとを去ったにもかかわらず、なおも白川に対して愛をささやき続けていた。「消磨」には多情な恋人に対する白川の複雑な心境が詳細に綴られている。

およそこんな手紙は、封を開けずにくずかごに入れてしまうのがよいのだが、白川はどうしてもそれを読んでしまうのだった。手紙を読もうとするのは、おそらく白川がなおもこの女性のことを忘れられないからなのだろう。その時、彼はいくばくかの不満を覚えて眉をぎゅっと寄せた。しかし、手紙を読み終えるとさらにまたもう一度読んでしまうのだった。――ここに、白川自身さえも明らかにできない、いわく名状しがたい感情がある。(一七)

複数人との関係を志向する恋人の態度に嫌悪感を示しながらも、彼女からの便りを繰り返し読まずにはいられない。「消磨」にはそうした男性主人公の姿が描かれている。興味深いのは、自身の相反する感情に対して、白川が冷静な分析を試みている点。「手紙を読もうとするのは、おそらく白川がなおもこの女性のことを忘れられないからなのだろう」といった描写には、自らの複雑な心中に迫ろうとする態度が見て取れる。しかしながら、白川が発見しえたのは、言語化できないもどかしい気持ちであった。「ここに、白川自身さえも明らかにできない、いわく名状しがたい感情がある」といった記述は、自身の相反する感情に言葉を与えようとすればするほど、かえって言葉を失ってしまう白川のジレンマを伝えている。

「黒点」の旋波や「消磨」の白川は恋人との関係を辛うじて繋ぎ止めることができていた。ところが「消磨」と同じく上海にて発表された「不能忘的影」(一九二九)(一八)は、恋人の女性に捨てられてしま

った男性をも描いている。この物語は恋人である梅との別離を回想する男性、林子平を主人公とする。梅と別れて間もない子平は、梅の肩を親しげに抱き寄せる男の姿を目の当たりにし、男への嫉妬心と彼女に対する未練を露わにする。この出来事は昨夜の梅との別れの場面を子平に否応なく振り返らせた。別れ際、「ぼくは君を愛してるんだ」と繰り返す子平に対し、梅はやさしくこう告げていた。

「わたしを信じて。わたしはあなたに楽しんでほしいだけなの。わたしたちはこれから別れるけれど、わたしたちの過去には幸せの影がたくさんあるんだから、そうした美しい印象を残しておきましょうよ。（中略）わたしがいまどうしてあなたと別れなくちゃいけないのかなんて、説明する必要なんてないと思うの。わたしがあなたと同棲するのにも何か理由がないのと同じようにね。それにあなたを愛してくれる女性に巡り合うかもしれないし……」[一九]

ここで注目したいのは、梅が子平と別れる理由を「説明する必要なんてない」と一蹴している点。つまり子平は一方的に別れを切り出され、訳も分からぬまま梅と別れるに至っているのだ。彼女の身勝手な言動にひどく心を痛めた子平は、もう二度と恋愛などすまいと決意し、「幸福な生活」を夢見て新天地上海へと旅立とうとする。しかしまさにその時、子平は梅と別の男との仲睦まじい様子を目の当たりにし、彼女が不実な関係を築いていたことを思い知るのである。

以上、一九二八年以降における胡也頻の恋愛小説をいくつか取り上げてきた。まず気付かされるのは、「恋人の女性と愛し愛される関係を築けず苦悩する男性主人公」という共通のモチーフが用いられている点である。そして恋人にとっての唯一無二の存在たりえないという現実に直面した時、その男性主人公のいずれもが、自らの内面を深く掘り下げようとするのは注目に値する。過去を回想するという行為も自己の内面を覗き見る一つの手段と言ってもよいだろう。

このことが持つ意味を書き手である胡也頻自身の視点から検討してみたい。胡也頻と丁玲が憧憬した愛情生活の破綻を知る我々は、やはりこれらの男性主人公の形象に既視感を覚えずにはいられないだろう。事実、本稿で挙げた小説には、胡也頻自身の経歴に重なる部分を至るところに見出すことができる。このことを踏まえるならば、胡也頻は恋人と唯一無二の関係を築けず苦悩する男性主人公を描くことを通じて、書き手自身が心に抱えていた傷痕を繰り返し眺め見ていたとは考えられないだろうか。こうした試みが可能となったのは、美しい理想が現実を前にいとも簡単に潰える運命にあったことを胡也頻自身が痛感したからにほかならないだろう。丁玲と二人で思い描いた理想が現実によって容易に打ち砕かれ、自らも恋人にとって大勢の内の一人にすぎないことを思い知った時、胡也頻はひとり自己の内面へと深く入り込んでゆく重大なテーマを発見したのではなかろうか。

五　おわりに

一九二八年、胡也頻は丁玲とともに上海へ旅立ったのちに「往

何処去」(一九二八)という小説を執筆している。この作品は、北京から上海へとやってきた貧乏作家、無異君を主人公とする。書店に自身の原稿を売り歩くなかで、無異君は現実的な問題に次々と直面し、やがては自己喪失に陥ってゆく。「往何処去」の無異君に北京から上海へ渡った胡也頻自身の姿を見出せることは言うまでもないだろう。このように、胡也頻の創作や人生において、北京および上海という場はやはり無視することのできない重要な舞台として存在しているように思われる。そこで以下、本稿の結びとして、北京と上海の二都市がいかなる機能や可能性を有していたのか、胡也頻の事例に即しつつ簡略に述べておきたい。

一九二〇年代において、北京という古都は活発な文芸活動が展開される文化の中心地であった。丁玲の言によれば、当時の北京の街に漂うロマン主義的情趣が胡也頻を現実世界から乖離させたという。北京という都市空間が存在したからこそ、胡也頻と丁玲は理想とする愛情生活を純粋なまでに追求し謳歌することができたとも言えるだろう。

しかし南方で革命の火の手が上がると、北京に蟄居する二人は次第に現実世界との隔絶を痛感することとなる。革命の消息を遠く離れた北京で耳にすることは、彼らに耐えがたい孤独と苦痛を与えたのである。丁玲に至っては、「わたしは北京を憎んだ。憎らしい北京！」と吐き捨てているほどだ。こうして胡也頻と丁玲は北京を離れ、上海へと南下する。国民革命の発火点たる上海は、現実社会への積極的な参与を求める場として、北京とは対極に位置する都市であった。北京というロマンチックな場を脱した二人が、理想の生活の破綻に直面したのは、ある意味では当然の帰結であったのかもしれない。

北京で「昨夜」を執筆した理想主義者たる胡也頻は、やがて現実世界との接点を求めて上海に至ったのちに「黒点」、「消磨」、「不能忘的影」を執筆している。上海のような場に居を移したからこそ、理想に溺れることなく現実を直視し、自分の内面に深く入り込む視点を胡也頻は獲得しえたのではないだろうか。

《注》

(一) 李向東・王増如『丁玲伝』上(中国大百科全書出版社、二〇一五年、総四一四頁)。引用は五三頁。

(二) 朱謙之『朱謙之文集』第一巻(福建教育出版社、二〇〇二年)一二九頁。

(三) 丁玲「致白濱裕美」『丁玲全集』第一二巻(張炯主編、河北人民出版社、二〇〇一年、総三六三頁)二六七～二六九頁。引用は二六七～二六八頁。

(四) 同注一、四三頁。

(五) 「悼雪峰」『丁玲全集』第六巻(張炯主編、河北人民出版社、二〇〇一年、総三三一頁)一三～一六頁。引用は一三～一四頁。

(六) 同注一、五五頁。

(七) 同注一、五五～五六頁。

(八) 同注三、二六八頁。

(九) 『晨報副刊』一九二七年五月一二、一四、一六日掲載。

(一〇) 『晨報副刊』一九二七年九月二六、二七日掲載。

(一一) 『晨報副刊』一九二七年一一月四、五、七日掲載。

(一二) 『世界日報文学』「文学」第五巻、一九二六年一一月一九日掲載。

(一三) 齊藤大紀「隣はナニをする人ぞ――胡也頻「昨夜――一段供状」と民国期のオナニー論」『夜の華　中国モダニズム研究会論集』(中国モ

ダニズム研究会編、中国文庫、二〇二一年、総四五〇頁）五二～八三頁。

（一四）『晨報副刊』一九二八年四月一一日、一二、一三日掲載。

（一五）同注一四、使用テクストは『胡也頻選集』上（福建人民出版社、一九八一年、総六八二頁）四六〇～四六八頁。引用は四六八頁。

（一六）『小説月報』第一九巻第一〇期、一九二八年一〇月一〇日掲載、一二一二～一二一六頁。

（一七）同注一六、引用は一二一四頁。

（一八）胡也頻『四星期』（華通書局、一九二九年）三四～四三頁。

（一九）同注二〇、引用は三九頁。

（二〇）『現代評論』第七巻第一七八～一八〇期、一九二八年五月五、一二、一九日掲載。

（二一）丁玲「一個真実人的一生」『人民文学』第三巻第四期、一九五〇年一二月一日掲載。翻訳には中島みどり編訳「あるほんとうの人間の一生――胡也頻を記念して」『丁玲の自伝的回想』（朝日選書、一九八二年、総二七五頁）八四～一一四頁がある。

（二三）同注二一、引用は九四頁。